

第二課 マルクス『経済学批判・序言』

『経済学批判・序言』(続き)

1、日本における史的唯物論の登場

日本では歴史観の変革が二度あった。

戦前。支配的な歴史観。軍人勅諭(1882年)と国定教科書。

最初の変革。野呂栄太郎と『日本資本主義発達史講座』

戦後。1945年、言論・思想の自由の獲得で、第二の変革。

三つの観点は今では歴史を見る常識となっている。

いまなお残る「前世紀の遺物」もある。

2、マルクスの定式を読む

定式(一) 生産力と生産関係。

経済の諸関係をつかむ。

注意する言葉。「彼らの生活の社会的な生産」。

「彼の意志から独立した諸関係」。

「物質的生産諸力」、「生産諸関係」。

そして階級。

定式(二) 経済的土台と上部構造。

社会全体を視野に入れて人間関係を見る。

言葉。「生産諸関係の総体」。

「法的かつ政治的な上部構造」。

「社会的諸意識形態」。

「生産様式」。

「存在が意識を規定する」。

上部構造は受け身の存在ではない。

定式(三) 社会革命の時代。

なぜ革命が起こるか。

言葉。「所有諸関係」。

「桎梏」。

「桎梏」は形態も現れ方も多様。

定式(四) 革命の時代。

土台と上部構造の両面から革命の時代を考える。

言葉。「イデオロギー諸形態」。

フランス革命と明治維新。これからの革命。

定式(五) 経済的社会構成体。その交替の法則性。

革命の物質的諸条件のとらえ方。

言葉。「社会構成体」、あるいは「経済的社会構成体」。
革命の進行の如何は、物質的諸条件だけでは決まらない。

定式(六) 人類社会の歴史。「前史」から「本史」へ。

人類社会の歴史の諸段階。

「アジア的生産様式」。

「古代的生産様式」。

人類社会の「前史」と「本史」。

「大づかみに言って」

3、史的唯物論で日本歴史を見る面白さ

古代史の見方。「まるごと奴隷制」。

マルクス、エンゲルス以後の発見で、世界史も変わってきた。

ギリシアでも、古典的奴隷制の前に「まるごと奴隷制」があった。

日本の封建制(江戸時代)を、マルクスはヨーロッパ中世の生きた見本と呼んだ。

人類社会の四段階を全部経験した貴重な歴史。

4、21世紀は、いよいよ、本史を開く時代

発達した資本主義国での革命運動の特質。